

鬼滅の刃 とある鬼狩りの苦勞譚

田中様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幸せが崩れ去る時は一瞬だ。だから私は少しでもいいから同じ境遇の人たちを助きたい。その一心で戦い、人々を救ってみせる。

※基本的にオリキャラ中心です。原作キャラもちよくちよく登場させて最終決戦までやっていきたいなと思ってます。あと分からないところは自分の勝手に考えた設定でいかせてもらいます。ゆるして。

目次

育手	4
鬼狩り	1

鬼狩り

私は幸せに暮らしていた。そこそこ裕福な家庭に生まれて優しい親の下で育ち、結婚を誓った幼馴染もいた。

だけどあの日、全てが変わってしまった。

「お母さん！お母さん！」

「うるさいぞ。女。お前は美しいから後で殺すつもりだったが、もう面倒くさい。今この場で喰い殺してやる」

私は身長が六尺ほどあってよくデカ女とか言われていたが、相手は裕に七尺は超えてそうな大男だった。

「いやーやめて！」

叫ぶと同時に左手で首を握り絞められ体が持ち上がる。

もう駄目だ。そう思ったその瞬間、

「うわあああ！彼女を離せ！」

幼馴染のみちおが包丁を握って大男に突っ込む。だが大男は虫を振り払うかのように手を上げ、彼の腹を貫通させる。

「いやあああ！みちおくん！」

「さつきから耳障りだ。もう死ね」

今度こそおしまい。絶望の中意識を失いかける。すると急に自分の体が落ちる感覚に襲われた。尻餅をついたがそんなこと気にせず呼吸を繰り返す。

「いてえ！」

大男は私を握り潰そうとしていた腕を抱えて悶えていた。よく見ると肘から先が無くなっていた。そして私の目の前に黒い制服を着ている人が背を向けて立っていた。涙でよく見えなかったが、頼もしい背中だった。

「なんだあ？お前は」

「おっ俺は！鬼殺隊！階級丁！橋本義輝！お前を倒す男だ！」

その声は少し頼りなくて、けれど頼りになる大きな声だった。私はその声を聴いて謎の安心感を感じた。

「邪魔だ！死ね！」

大男が大きく腕を振りかぶる。

「大丈夫だ！俺ならいける！」

炎の呼吸 一の型——

「不知火!!」

一瞬で大男の首が跳ぶ。炎が見えた気もしたが、何をしたのか見えなかった。首を切った声の主の事を見ると、驚いた。義輝と名乗った声の主は自分と同じくらいの子で、義輝は持っていた赤い刀を手慣れた様子で納刀し、

「ふう。あ！大丈夫ですか!？」

額の汗を拭いてこちらに駆け込む。

「は、はい私は大丈夫なのですが……」

母の亡骸を一瞥する。

「申し訳ありません……俺がもう少し来るのが早ければ……」

「い、いえ、貴方が来なければ私も母と同じ帰らぬ人になっていました」

暫く沈黙が二人の間に流れる。気まずい状況で義輝が沈黙を破り、

「あの……早々こ、こんな話をするのもあれなのですが、かかか、帰るあてはあ、あるのですか?」

「あ、それは……もうこの家にしかないのですが……あの!」

「な、なんでしょうか?」

私は義輝といった少年に顔を近づけて問う

「先程の男はなんなのですか!？」

「あ、あれは鬼っていう人を喰う怪物です」

もつと顔を近づけて問い出す。

「鬼は何匹もいるのですか?」

「は、はい。日本の至る所に……」

もつともつと顔を近づけて問う。

「鬼殺隊とやらには女でも入れるのですか!？」

「は、はひ、入れますけども……ええ!？も、もしかして」

私は拳を握り、立ち上がる。

「はい。私も入り、少しでも鬼の被害を減らし、私のような思いをする

人を減らしたいのです！」

「な、何人か同じような人を助けたことあるけどこんな人初めてだ・・・」

ぼそりと義輝がつぶやく。

「？なにか言いました？」

「い、いえ・・・うっっっん。わかりました！で、では聞きますがまずお名前は・・・？」

その気になってくれたのか義輝は私に名前を聞いてくる。

決意を胸に抱き、目を閉じる。母と幼馴染のみちおに一言だけ告げる。

（お母さん。みちおくん。私は行きます。）

目を開き、名を告げる。

「私の名前は、立風 雫です」

育手

「あぎやー！」

「何回言ったらわかるんだ！腹に力がこもってない！もつと全力でやれこの野郎！」

最悪だ。腹を殴られて女の子らしくない声をあげる。そしてすぐに罵詈雑言の嵐。女だからって構わず殴りつける。なんでこんなことになったんだろうー

「え？すぐには入れませんか？」

義輝から何を当たり前のことを言ってたんだ、とか言いたげな顔で告げられた。

「あ、えつとその、まず最初に育手と呼ばれる技の指南をしていらっしやる人達からいろいろと教えてもらうんです。そして最後に最終選別という試験を突破できたら晴れて鬼殺隊員です」

聞くだけだと意外とさつきくりいけそうだが、まあ楽ではないのだろう。とりあえず最初にすべきことは分かった。

「まず育手？の方を紹介できますか？」

「あ、はい。お、俺の知っている方ですと」

それで紹介されたのがー

「こんなところで吐くんじゃねえ！ほら！さつさと起き上がって続けるぞ！そもそも技つてのはなあ！」

乱暴者のじいさん、響山源之助だった。義輝の紹介で山奥まで行くことになった。正直うちの住んでた所より深い山だった。

最初の三ヶ月は死ぬ程、ていうか本当に死にかけてるまで走らされた。その時は「基礎的な運動能力は高い。生まれつきいいんだな」と言われて少し有頂天になっていた。型と呼吸の鍛錬に入るとそれはそれは地獄だった。

悔しいことに教え方は普通に上手いのか、呼吸による動きはすぐに見えるようになった。最悪なのは型だ。そう、私は剣術の才能が無

かった。五ヶ月ほど経って幾分かマシになったのだが、やはり響山さんの理想とはかけ離れてたようで、何度も怒られ、いろんなところをぶん殴られた。

一応義輝の剣術を教えた人と聞いている。引退時は一番高い階級ではなかったらしいが、多くの鬼を倒してきた。柱の次に階級が高い『甲』だったらしい。それに炎の呼吸を教える数少ない育手なので教えをもらいたがる人も多いはずなのだが・・・なんとなく分かった。

「今日は素振りだ。太刀筋の矯正をする。十万回振れ」

「じゅう・・・!?!」

「いいからやれってんだよ!」

またゴチンと殴られた。最近いつもこんな様子だ。いつまでも型をうまくやれないから呆れられてしまったのだろう。

最近手のひらの豆が増えてきた。最近体つきががっしりしてきた。髪も体も汚れが酷い。私は鬼を倒すため女らしさを捨てた。全て私のような思いをする人たちを助きたい一心でだ。

だからー

「待ってください!もう一度だけ私に型を教えてください!」

「ああ?」

「お願いです!どうか・・・」

「違えよ」

「へ?」

呆れたような溜息をつかれ、思わず変な声を出してしまう。

「お前よお、俺に呆れられたとか思っているよな?違うんだよ。そもそも太刀筋がなってねえから素振りって言ったんだ。お前のへろへろの太刀筋じゃ鬼の首どころかそこらの竹だって切れんよ。だから俺はまず基本の素振りをしろって言ってるんだよ!このバカタレ!」

さつきより強く殴られた。痛い。

「は、はい・・・すみません・・・」

きつと今の自分の顔は恥ずかしくて真っ赤になっているだろう。だけど、今は呆れられてないという安心感でいっぱいだった。

それから数ヶ月かけてやっと及第点をもらった。それでも結局炎の呼吸は伍の型までしか習得できなかった。

「それでは、行ってまいります。響山さん」

「フン・・・まあ、その、なんだ・・・死ぬんじやねえぞ」

真つ赤な着物を着て刀を腰に刺す。響山さんはそっぽを向いているが、顔も赤くなっているのか耳まで着物より赤く染めていた。

「絶対に死ぬなよ」

「はい。死ぬつもりはありません」

響山さんとの最後かもしれない別れを惜しみながら目的である藤襲山へ歩を進める。死ぬつもりは全く無いが。

しばらく歩き続けると、花の匂いがしてきた。山の階段を上がっていくと大量の藤の花が咲いていた。藤の花の咲く時期とはいえこんなに多く咲いているのは初めて見たかもしれない。少し上つているうちに終わりが見えてきた。

上には刀を持った隊士候補が多くいた。二十、いや二十五はいるだろう。顔に傷をつけている者も多い。

(この中で女の剣士は・・・私だけか)

強そうな人ばかりで少し萎縮してしまう。そんなことを考えていると着物を着た女の子たちが話しを始めた。

いろいろと話しているが端的に言うとう鬼のいる所で七日間生き抜けということらしい。

帯をきつちりと締め、刀が緩んでないか確認。準備をしつかりとする。そして最後に必要なのは・・・覚悟だ。響山さんからの受け売りだが。

「ーでは行ってらっしゃいませ」

そして最終選別は始まった。

覚悟を決めたのはいいものの一ー

「ふう、ふう」

極度の緊張と不安で息が乱れる。落ち着け、響山さんから教えてもらった事を忘れるな。さっきからずっとこの山からは死の気配を感じる。藤襲山。いやな感じだ。

「うわああああ！」

叫び声が聞こえる。どこかで襲われているんだ。こんなことを七日間も、気が狂ってしまいそうだ。なんて考えてるとまた息が乱れてくる。だめだ。こんな負の感情の繰り返しでは自然と疲れてくる。まだ一日も乗り越えられていない。

「ひやはは！人間だ！それも女！」

「ッ!？」

急に目の前に鬼が現れる。心臓が痛いほど跳ね上がるが、すぐに整える。

「ひひ！しかもなかなかデケエな。その分栄養も豊富だろう！さあ！俺の糧となれええ！」

「うひやあ！キモい！」

鬼が私に一直線で向かってくる。

大丈夫よ雫！修行の日々を、技を思い出せ！敵は真っ直ぐ来る！なら！

炎の呼吸 弐の型――

「昇り炎天！」

刀を抜刀し、首を狙う。燃え盛る炎のような激しい呼吸音を立てて鬼の首を切り裂く。

「ぐげらう！」

鬼はガマガエルのような声を出して倒れた。首が落ち、灰になってしまった。義輝さんが鬼を倒した時と同じだ……。

やれる。これなら私でも鬼と渡り合える。

膝について咳を混む。やはり炎の呼吸は一撃の力が強いが、すぐに疲れてしまう。響山さんは何度使って見せたときはあまり息を乱してなかった。やはり圧倒的な経験の差なのだろうか。この最終選別で生き残ったら聞いてみよう。

しばらくして太陽が上ってきた。張り詰めた緊張の糸が切れ、ぱたんと倒れこむ。よかった……一日目を乗り切った。途中、地響きのような足音を感じた時は死んだかと思ったがやっと一日生き残れた。だが一日、たった一日だ。まだ六日もあるんだ。それをどうやって

生き延びるか。それを昼間の間に考えるんだ。
（疲れた・・・少しだけ・・・眠いわ・・・）
私はそのまま瞼を閉じ、深い眠りについた。